

専業名：研究開発学校
学校名：北広島町立芸北中学校
所在地：山県郡北広島町川小田 75-1
HP：http://www.geihoku-j.hiroshima-c.ed.jp/
学校規模：5学級、81名

1 研究の概要

(1) 研究テーマ及び研究のねらい

①研究開発課題

小学校段階から「ことばの技能科」「英語科」を新設した場合の(保)幼小中高13年間の一貫・系統性ある教育課程についての研究開発

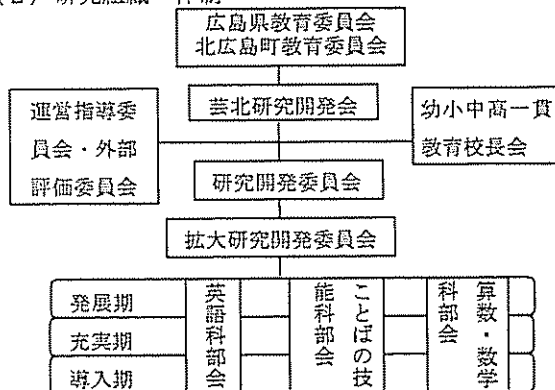
「めざす子ども像」

国際社会、実社会で生きる論理的思考力とコミュニケーション能力を身に付けた子ども

②研究のねらい

(保)幼小中高13年間を「導入期(保・幼～小4)」「充実期(小5～中2)」「発展期(中3～高3)」に区分し、小学校段階から論理的思考力、コミュニケーション能力の基礎となる力を育てる「ことばの技能科」及び「英語科」の新設、「算数・数学科」の教育課程、指導方法、評価について研究開発し、論理的思考力、コミュニケーション能力の育成を図る。

(2) 研究組織・体制



(3) 研究の内容

次のことについて研究し、定期的に行う学力調査、アンケート調査や外部評価を踏まえ、(保)幼小中高13年間の一貫・系統性ある教育の在り方について提言を行う。

- ①言語技能の習得、論理的思考に基づく論理的表現力の開発をめざす小・中学校の新設教科「ことばの技能科」の教育内容、指導方法の研究
- ②(保)幼小中高の「英語科」の連携(教育内容、指導方法、コース選択等)
- ③「算数・数学科」における校種・学年を超えた指導交流、コース選択・習熟度別学習の実施
- ④「ことばの技能科」と「英語科」「算数・数学科」との関連

2 授業改善の視点

(1) 学習期区分について

(保)幼小中高13年間の一貫性ある教育を考えていく場合、各校種間の接続が課題となり、校種間の連

携を図りながら共通理解をもって実践することが困難である。そこで教育内容・指導方法の連携をよりスムーズに行うために、各校種間で接続している学年が同じ学習期となるよう期区分を行い、教育課程の開発に取り組む。そのことで、児童生徒に起こる教育内容や指導方法等の「ギャップ」を取り払う。

(2) 合同授業・連携授業や指導交流の実施

幼児児童生徒が授業で共に活動することで、期待感・安心感や自己肯定感を持たせる。さらに、職員が相互の指導方法を学び合う。これらの目的のために次の内容で、合同授業・連携授業や指導交流に取り組む。

①(保)幼小連携

(保)幼小連携授業では小学校への入学後を見すえ、英語科では英語を使ったゲームやスキットを取り入れたりALTによる指導を行ったりして、コミュニケーションへの積極性を高める工夫を行う。算数科では、具体物を用いた算数的活動などを取り入れることにより、数量・図形に対する豊かな感覚を育む。また、互いの意見を出し合い、話し合いをさせることにより、幼児児童のコミュニケーション能力の育成を図るとともに、小学校の学習へのスムーズな接続を図る。

②小中連携・小学校合同授業

小中連携では、児童生徒が英語科、算数・数学科で学習活動を共に行うことで互いの良さを学び合わせるよう工夫を行う。授業の中で小グループを編成して一緒に学習し、「ことばの技能科」で学習した内容を生かして話し合いを行う。小学生は中学校での学習への見通しを持つことができ、中学生は小学生に教えることで自己肯定感を持つことができる。また、小学校の横のつながりと、中学校生活への適応を考え、5小学校の5・6年生が中学校の施設を使い、英語や体育の合同授業を行う。

③中高連携

教職員の相互乗り入れや連携授業・合同行事などに継続的に取り組む。相互乗り入れでは、英語科・数学科を中心に取り組み、基礎・基本の定着を図る。連携授業は高校の4類型に合わせて中学校の選択授業を開設し、高校での学習内容の把握や進路設計に役立てる。

これらの取組みをもとに、それぞれの部会・校種において、次の視点で授業改善を行う。

- ①それぞれ上級学校の学習形態を考慮し、校種接続学年での指導方法や授業規律の見直しを行う。
- ②「めざす子ども像」に向け、各部会で一貫・系統性ある教育課程を作成し、児童生徒の実態や発達段階に応じた教材開発を行う。
- ③「ことばの技能科」との関連を明確にした授業を関連教科で行う。

3 研究の成果と課題等

(1) 成果

- ①合同授業や連携授業を行うことで、校種間の接続

部分で上級学校に対する不安が軽減され、児童生徒にとってスムーズな適応ができています。また、これらの授業に対しては肯定的な感想が多く、興味・関心が高いことが分かった。

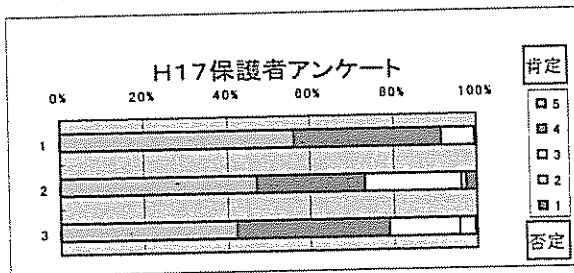
- ②連携授業を通し教職員の指導交流が進み、児童生徒理解も深まり、指導方法の改善が図られた。
- ③「ことばの技能科」を中心とした英語科、算数・数学科の学習により、筋道を立てて考え、分かりやすく相手に伝えようとする力が培われつつある。

(2) 課題

- ①合同授業・連携授業が単発で終わることなく、一貫・系統性のある教育課程への位置付けが必要である。
- ②児童生徒の学習目標やその評価について、さらに一貫性をもたせ明確にしていく必要がある。
- ③「ことばの技能科」を中心に、各教科との関連をもたせて指導することは、「論理的思考力」「コミュニケーション能力」を育成するうえで有効である。今後、さらに教育課程の編成に生かす必要がある。
- ④「ことばの技能科」で付けた力をさらに伸ばし、生活の場で生きて働く力を付けていく必要がある。

(3) 今後の改善方策等

- ①学習期区分を3期に分け教育課程を作成しているが、従来の校種枠を超えてない部分があるので、その改善を図る。
- ②連携授業に関わって、一貫・系統性のある教育課程の位置付けを明確にする。
- ③指導方法の改善と上級生が下級生へ指導するチューター制の機能化を図る。
- ④連携授業や13年間の幼小中高一貫教育に対する保護者の期待も大きい。今後、さらにこの取組みを進め、研究開発を实のあるものにしていきたい。



<項目>

- 1…学校が校種間交流をして授業や研修をすることはよいことだ
- 2…13年間の幼小中高一貫教育を今後も進めて欲しい(7月)
- 3…13年間の幼小中高一貫教育を今後も進めて欲しい(12月)

4 実践事例「小中連携授業」

(1) 学年・教科名

- ・芸北地域小学校5年生・中学校2年数学コース
- ・算数・数学科

(2) 単元の紹介

- ①単元名「ともなって変わる2つの数量」
- ②単元の目標

- ・ともなって変わる2つの数量について、それらの関係を調べたり表したりすることができる力を伸ばす。さらに、「ことばの式」から「文字式」への導入を図る。
- ・具体的な事象の中から2つの数量を取り出し、それらの変化や対応を調べたりすることを通して、1次関数についての理解を深めるとともに、表現し考察する能力を養う。

(3) 授業改善のポイント

①指導方法の工夫

小学校の合同授業で培った横の連携を発展させ、小中連携授業を小中教員がTT形式で行う。また、小・中学生が小グループを作り学習活動を進めることで、中学生がリーダーとなり小学生を支援する。

②教材の工夫

学習内容は中学校の学習につながるもので、「気温のプラス・マイナス表示」や「マッチ棒並べ」など、身の回りにある課題や操作活動を伴う教材を扱い、児童生徒の体験が生かされたり、交流がスムーズに行われたりする教材にした。また、解き方や答えに多様性がある課題を取り入れた教材を用い、個々の興味・関心を高めるとともに、学習の個別化を図った。

③評価の工夫

児童生徒それぞれの評価規準を設定し、行動観察や発表内容・学習プリントをもとに、小中それぞれの教員が評価する。その際、小学校の教員は中学生に、中学校の教員は小学生に対して、肯定的評価・指導的評価を入れるようにした。

(4) 成果と課題

①成果

- ・小学生、中学生とも授業に対し肯定的な意見が多く、学習に対する意欲・関心が高かった。
- ・解き方や答えに多様性がある課題を取り入れることで、お互いの発想や考え方に刺激を受け、数学的な見方考え方を広げることができるとともに、自分の考えを分かりやすく的確に伝えようとするコミュニケーション能力を培うことができた。
- ・小学生においては中学校での学習の一部を知ることができ、学習の発展性を知ることができた。
- ・教員にとって、小中互いの教育内容について理解を深めることができた。

②課題

- ・つまづきやすい小・中学校の学習内容等で、連携授業を視野に入れた指導内容の充実や学習展開の工夫を行う必要がある。
- ・学期に1回の取組みであるが、今後、児童生徒の活動時間をさらに確保することで、学習の広がりや深まりが期待できると考えられる。
- ・小・中学校教員相互の役割を工夫し、児童生徒の思考活動がより活発になるようにする必要がある。